

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520548

研究課題名 (和文) 西洋・日本の植民地主義と「近代」：比較研究のパラダイム構築に向けて

研究課題名 (英文) European / Japanese Colonialisms and 'Modernity' : Towards the Construction of an Holistic Paradigm for Comparative Research

研究代表者

水谷 智 (MIZUTANI SATOSHI)

同志社大学・言語文化教育研究センター・講師

研究者番号：90411074

研究成果の概要 (和文)：本共同研究では、日本（朝鮮、台湾、沖縄等）とヨーロッパ（イギリス、フランス、オランダ、スペイン、ドイツ等）の植民地史を、「医療」「官僚制」「人種主義」といった＜近代性＞の問題系に属する主題を軸に再検討した。植民地主義をグローバルな文脈で共同研究するにあたっての＜比較＞の必要性和危険性の両方に十分に注意を払いながら、様々な支配経験に関する実証研究を突き合わせ、相互参照を可能にする枠組および概念の創出を目指した。その結果、近年の植民地研究の鍵となっている「植民地近代性」(colonial modernity) の概念の可能性と限界が明らかになった。また共同討議の過程で、議論の対象とした植民地帝国のそれぞれが、他国との＜比較＞によって自国の支配を正当化し統治政策を策定していた歴史像が浮かび上がってきた。＜比較＞それ自体を歴史研究の対象として主題化し、植民地主義の一部としてそれを根底的に検証し直す必要性が理解されるに至ったのも、本研究の重要な成果の一つである。

研究成果の概要 (英文)：Our project reexamined the colonial histories of both the Japanese and European empires (the British, French, Dutch, Spanish, and German) from a comparative perspective through analyzing specific themes concerning 'modernity'. Duly aware of both the necessity *and* danger of the vary act to 'compare', the project sought to pursue the possible terms and frames of comparison. The project brought together a range of different colonial experiences, and conducted an holistic analysis of them. Of particular importance was the complex relationship of these experiences to modern institutions and ideas such as sanitation, bureaucracy, 'race', and education. As a result, we came to notice a growing importance attached by contemporary scholars to the notion of 'colonial modernity'. We tried to clarify the notion's scope and limits, considering in detail their implications for collaborative comparative research. Second, but no less importantly, we found that 'comparative studies of colonialism' were themselves part and parcel of the imperial formations in the past. Empire-states themselves practiced comparison both to claim their individuality and to share across imperial boundaries the knowledge / skills of colonial governance. Therefore, what is required of us scholars of colonialism today is to engage in comparison, but with a view to transcending it by problematising its imperial trajectories in the past and its lingering relevance to our post-colonial present.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：植民地帝国、日本、ヨーロッパ、比較、植民地近代性

## 1. 研究開始当初の背景

植民地研究は英語圏を中心に急速にグローバル化していた。日本の学界にも欧米の概念や枠組みが導入されていたが、ヨーロッパの帝国国家による植民地支配の経験の一般化を通して導き出された「ポストコロニアル論」をく応用する矛盾も明らかになりつつあった。その一方で、国際的な潮流から距離を置き、帝国日本の植民地主義の「特殊性」に重点を置く研究の問題も、植民地主義の世界史的展開を考えれば明らかであった。こうした現状を打開するために、クリティカルなく比較の視点から植民地主義研究を再検討することが喫緊の課題であった。

## 2. 研究の目的

日本（朝鮮、台湾、沖縄等）とヨーロッパ（イギリス、フランス、オランダ、スペイン、ドイツ等）の支配経験に関する実証研究を、く近代性くに関する様々な主題に沿って突き合わせ、相互参照を可能にする共通の枠組および概念を創出することが本研究の目的であった。

## 3. 研究の方法

研究代表者・分担者および必要に応じて招聘されたゲスト研究者による発表報告とそれらに関する共同討議を中心に、ヨーロッパと日本の植民地主義を批判的なく比較くの視点から再検討した。その際、以下の2点に特に留意した：

(1) 「衛生」「伝統」「教育」「官僚制」「民族主義」「人種論」などの共通テーマを毎回の共同討議のために設定し、常に特定の観点からヨーロッパと日本の植民主義を比較検討する。

(2) 「植民地近代性」の概念が、欧米、日本、韓国でいかに使われているかを検証する。

## 4. 研究成果

(1) 上記の「研究方法」を念頭に置き、以下の研究会を開催し、議論を深めた（下線は

本科研のメンバーを示す）：

- 1) 水谷智「植民地主義研究の歴史と今後の展開に関する考察」（2007年4月15日）
- 2) 戸邊秀明「日本植民地研究の現在—その広がりを捉えるために—」（2007年6月30日）
- 3) 板垣童太「植民地主義と近代：朝鮮史における論点整理」（2007年7月1日）
- 4) 水谷智「『帝国国家』と近代世界：支配と抵抗の多様性と限界」（2007年7月1日）
- 5) 永淵康之「人類学における植民地研究」（2007年9月20日）
- 6) 平野千果子「交錯する歴史、すれ違うまなざし—フランス植民地帝国と同化、共和国、移民—」（2007年9月21日）
- 7) 水谷智「植民地主義とく伝統くの創造：英領インドにおける「寡婦殉死」をめぐる言説」（2008年4月12日）
- 8) 三原芳秋「T. S. エリオット「伝統」論の帝国日本／植民地朝鮮における変容」（2008年4月12日）
- 9) 三ツ井崇「植民地期朝鮮のハンゲル運動の展開とその性格」（2008年4月13日）
- 10) 水谷智「イギリス帝国における官僚制と植民地支配：インドの事例を中心に」（2008年7月5日）
- 11) 岡本真希子「帝国日本における官僚制と植民地支配—朝鮮・台湾を事例として」（2008年7月5日）
- 12) 松久玲子「メキシコ革命期におけるフェミニズム運動と近代化思想としての優生学」（2008年4月12日）
- 13) 脇村孝平「『帝国医療』と『国際保健』の間—国際衛生会議と国際連盟保健機構」（2008年9月19日）
- 14) 慎蒼健「植民地朝鮮における伝統医学の再編成」（2008年9月19日）
- 15) 板垣童太・水谷智「朝鮮史におけるく植民地近代性く論の可能性と限界：サバルタン研究をめぐる論争も参照しながら」（2008年9月20日）
- 16) 藤井たけし「ポストコロニアル民族主義とその運命：日帝と米帝のはざまで」（2008年10月28日）
- 17) 洪宗郁「解放前後における主体形成の企て—朝鮮社会主義者の「転向」を中心に—」（2008年11月1日）
- 18) セバスチャン・コンラッド「比較の視座から問うドイツ植民地主義」（2008年11月2日）

- 19) 呉成哲「争訴地帯としての植民地教育—朝鮮人と普通学校」(2009年1月17日)
- 20) 陳培豊「東アジアの「同文」構造及び植民地統治下台湾の「同化」教育——「類似」と「差異」の観点から見た国語、文盲、漢文、階級——」(2009年1月17日)
- 21) 杉山佳子「フランス保護領チュニジアにおける学校—言語・宗教・地域社会」(2009年1月18日)
- 22) 永渕康之「東南アジア」における帝国と「混血問題」(2009年4月18日)
- 23) 坂野徹「日本の混血研究—戦前・戦後の連続性を考える」(2009年4月18日)
- 24) 栗原純「台湾総督府の戸籍政策と共婚法」(2009年4月19日)
- 25) ガッサン・ハージ「ホワイト・マルチカルチュラリズムの限界の植民地起源について」(2009年6月27日)
- 26) テッサ・モーリス・スズキ「日本の植民地主義、移民、外人恐怖症」(2009年6月27日)
- 27) 塩原良和「オーストラリアの「多文化主義」から見る、日本の「多文化共生」」(6月27日)
- 28) 岡本真希子「植民地台湾における内地人の政治・言論活動」(2009年8月1日)
- 29) 水谷智「イギリス帝国の人種秩序と植民地インドの白人系「孤児」」(2009年8月1日)
- 30) 木村健二「在朝日本人の生活と異文化認識」(2009年8月1日)
- 31) 笹川秀夫「近現代のカンボジアにおける国民文化の形成過程」(2009年10月24日)
- 32) 藤原貞朗「『オリエンタリストの憂鬱』以後」(2009年10月24日)
- 33) 朴美貞「朝鮮博覧会(1929)と京城の空間形成—植民地近代性の論点から」(2009年10月25日)
- 34) 長谷川一年「19世紀フランスのナショナル・アイデンティティ」(2010年1月9日)
- 35) 北村嘉恵「霧社事件をめぐる歴史叙述・歴史認識」(2010年1月9日)

(2) 上記の共同討議の結果、主に以下の知見を得た：

- ① <植民地近代>を軸に特徴を比べることより、様々な植民地主義のあいだの相違や共通性が明らかになった。しかしその一方で、<比較>そのものに理論的、倫理的問題が内在する現実が浮かび上がってきた。<比較>は、過去の植民地帝国によって自己の正当化と統治政策の策定的手段として頻繁に用いられた一面があったのであり、その痕跡は自国の植民地支配の過去を正当化する現代の<記憶のポリテクス>にも確認されている。よって、批判的な

植民地主義研究に現在求められているのは、<比較する主体>としての植民地帝国の特質を洗い出し、<比較>自体を批判的研究の対象とすることである。

- ② <植民地近代性>の概念が欧米、日本、韓国の各学界で大きな影響を持つとともに、論争の的になっていることを確認した。共同討議の結果を踏まえ、この概念の可能性と限界を明らかにした。
- ③ 研究会には計6名の海外ゲスト(セバスチャン・コンラッド[ドイツ]、呉成哲[韓国]、陳培豊[台湾]、ガッサン・ハージ[オーストラリア]、テッサ・モーリス・スズキ[オーストラリア]の各氏)を招聘し、共同研究の国際化につとめた。また、日本植民地研究の歴史と現状について論じた論文を英語で共同執筆し、共同研究の成果を国際的に発信する準備を整えた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計26件)

- ① 板垣竜太、戸邊秀明、水谷智「日本植民地研究の回顧と展望：朝鮮史を中心に」『社会科学』(同志社大学人文科学研究所)、査読有、40巻2号、1-32頁、2010年[刊行決定]
- ② 板垣竜太「日韓会談反対運動と植民地支配責任論：日本朝鮮研究所の植民地主義論を中心に」『思想』(岩波書店)、査読無、1029巻、219-238頁、2010年
- ③ 水谷智「イギリス帝国の人種秩序と植民地インドの白人系「孤児」—ジョン・グラハムの教育事業—」『西洋史学』(日本西洋史学会)、査読有、236巻、39-59頁、2010年
- ④ 水谷智「<比較する主体>としての植民地帝国—越境する英領インド教育政策批判と東郷實」『社会科学』(同志社大学人文科学研究所)、査読有、85巻、1-29頁、2009年
- ⑤ 板垣竜太「批判と連帯：日韓間の歴史対話に関する省察」『文化人類学』、査読有、74巻2号、293-315頁、2009年
- ⑥ 松久玲子「メキシコの家再建期におけるフェミニズムと女子教育—エレナ・トレスの女子教育観を中心に—」『ラテンアメリカ研究年報』、査読有、29巻、1-29頁、2009年

年

⑦ 三ツ井崇 「言語問題」からみた朝鮮近代史—教育政策と言語運動の側面から—『中国 21』、査読無、31 巻、285-306 頁、2009 年

⑧ 平野千果子 「交錯するフランス領アフリカとヨーロッパ—ユーラシア概念を中心に」『思想』第 1021 巻、査読無、178-199 頁、2009 年

⑨ 三ツ井崇 「日中戦争期以降の福井県における朝鮮人融和／統制団体の教育・教化事業—『福井新聞』記事の分析を中心に—」『日韓相互認識』、1 巻、査読無、1-18 頁、2008 年

⑩ 水谷智 「植民地主義と近代性の関係を再考する：フレデリック・クーパーの論考から」、『社会科学』（同志社大学人文科学研究所）、査読有、79 巻、173-185 頁、2007 年

[学会発表] (計 11 件)

① Ryuta Itagaki, 'On Colonial Responsibility', コーネル大東アジアプログラム、2009 年 11 月 12 日、Ithaca, NY: Cornell University

② 三ツ井崇 「言語問題」からみた朝鮮近代史—教育政策と言語運動の側面から— (朝鮮語)、仁荷大学校文科大学人文科学研究所招請学術セミナー、2009 年 10 月 29 日、仁荷大学校 (大韓民国)

③ Yasue Arimitsu, 'Nation and Literature: Literary Possibilities in a Multicultural Society', *International Symposium on Racism, Slavery, and Literature*, 2008 年 12 月 3 日、Innsbruck University (Austria)

④ 松久玲子 「エレナ・ドレスとメキシコ革命期の農村教育」日本ラテンアメリカ学会第 29 回定期大会、2008 年 6 月 7 日、筑波大学

[図書] (計 16 件)

① Ryuta Itagaki, Hideaki Tobe, Satoshi Mizutani, 'The Japanese Empire', in (eds.) J. Marriott and P. Levine, *The Ashgate Research Companion to Modern Imperial Histories*, Ashgate, 2011 年刊行決定 (証明書有)

② アン・ストローラー (永瀨康之、水谷智、吉田信訳) 『肉体の知識と帝国の権力』、以文社、357 頁、2010 年

③ 平野千果子 「人道に対する罪」と「植民地責任」—ヴィシーからアルジェリア独立戦争へ—永原陽子編『「植民地責任」論—脱植民地化の比較史』、青木書店、66-100 頁、2009 年

④ Satoshi Mizutani, 'Contested Boundaries of Whiteness: Public Service Recruitment and the Eurasian and Anglo-Indian Association, 1876-1901', in (eds.) H. Fischer-Tine & S. Gehrman, *Empires and Boundaries: Rethinking Race, Class, and Gender in Colonial Settings*, Routledge, pp.86-106, 2009 年

⑤ 板垣竜太 「脱冷戦と植民地支配責任の追及：続・植民地支配責任を定立するために」、金富子・中野敏男(編)『歴史と責任：「慰安婦」問題と一九九〇年代』、青弓社、260-284 頁、2008 年

⑥ 板垣竜太 『朝鮮近代の歴史民族誌：慶北尚州の植民地経験』、明石書店、449 頁、2008 年

⑦ ケイト・ダリアン＝スミス、有満保江 (編) 『ダイヤモンド・ドッグ：＜多文化を映す＞現代オーストラリア短編小説集』、現代企画室、239 頁、2008 年

⑧ 三ツ井崇 「朝鮮」日本植民地研究会編『日本植民地研究の現状と課題』、アテネ社、91-119 頁、2008 年

⑨ 永瀨康之 『バリ・宗教・国家—ヒンドゥーの制度化をたどる』、青土社、328 頁、2007 年

⑩ 田中宏・板垣竜太 (編) 『日韓 新たな始まりのための 20 章』、岩波書店、156 頁、2007 年

[その他]

ホームページ等  
www.dosc.sakura.ne.jp

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水谷 智 (MIZUTANI SATOSHI)  
同志社大学・言語文化教育研究センター・  
講師  
研究者番号：90411074

(2) 研究分担者

平野 千果子 (HIRANO CHIKAKO)  
武蔵大学・人文学部・教授  
研究者番号：00319419

有満 保江 (ARIMITSU YASUE)  
同志社大学・言語文化教育研究センター・  
教授  
研究者番号：20097075

三ツ井 崇 (MITSUI TAKASHI)  
同志社大学・言語文化教育研究センター・  
准教授  
研究者番号：60425058

永渕 康之 (NAGAFUCHI YASUYUKI)  
名古屋工業大学・工学研究院・教授  
研究者番号：30208045

松久 玲子 (MATSUHISA REIKO)  
同志社大学・言語文化研究教育センター・  
教授  
研究者番号：40239075

板垣 竜太 (ITAGAKI RYUTA)  
同志社大学・社会学部・准教授  
研究者番号：60361549